

橋川文三 研究ノート

—橋川文三（1985,1986）『橋川文三著作集』第1巻—第8巻を中心として—

藤 田 昌 志

橋川文三 研究札記

—橋川文三（1985, 1986）《橋川文三著作集》以从第1巻到第8巻为中心—

FUJITA Masashi

【摘要】

橋本文三は‘戦時派’（在战争期间度过青年时代的人）、是在战争中成长起来的。橋本文三力图在逐渐美国化的战后日本这个背景下重新评价日本的过去。也就是说，他是重新审视明治以后近现代日本“过去”的学者。可以推测其思想来自对战争时期丧生的朋友们的赎罪意识。本研究札记以桥本文三《著作集》为主要资料来考察他重新审视日本‘过去’的思想。

キーワード：ナショナリズム 超国家主義 近代日本と中国 竹内好

1 序に代えて

橋川文三は「戦中派」（1945年の敗戦時に10代後半から20代前半の青年期であった世代を指す）⁽¹⁾で、戦争中に育った人である。戦争が正常で平和が異常であるという感覚を抱いて、しばしば「戦死」への憧れを語った世代の一人である。戦中派の代表的存在には評論家の吉本隆明や作家の三島由紀夫がいる⁽²⁾。吉本隆明の『共同幻想論』も今となっては懐かしいが、三島由紀夫の『金閣寺』は破滅へ向かう世界のなかで「金閣寺」が美の絶対的象徴と化したのち、戦争が終わり、生きることを強要された主人公がかつて滅亡への道を共有したと思った唯一美、絶対美としての「金閣寺」に復讐する小説である。金閣寺を焼いた主人公が「一ト仕事を終えて一服している人がよく思うように、生きようと私は思った。」と述べて、小説は終わる。『金閣寺』の主人公は「死」を賛美する世界から、真逆の「生」を賛美する世界へコペルニクスの転回を体験させられたのである。

橋川文三は戦争で死んでいった者と生き残った自分の関係に悩み、「死」ぬべく運命づけ

られていると思っていた自分が生きていかなければならない「とまどい」の思いを持ちながら、戦後を生きた。橋川は安易に戦前の過去を美化しないし、丸山真男のように否定もしない。こうした人は三島由紀夫に自伝を書くように依頼され、竹内好のような人と親しくし、とりわけ竹内好からは週に一度、中国語を習うほどの親密さを保った。二人には敗戦前の日本を意識して生きるという共通点があった。

『橋川文三著作集』1—8（＝第1巻から第8巻。以下、同様に「第」と「巻」を略し、数字だけとする。）は1985年から1986年にかけて筑摩書房から刊行され、のちに増補版が出版されている。今回は最初の1—8の『橋川文三著作集』（以下、『著作集』と略す。）を中心に研究ノートを書いてみたい。将来、書く予定の橋川文三論の前の研究ノートとした。『著作集』1—8には巻末に「解題」が付されていて、「解題」の最初の頁に松本健一氏によるその巻の簡単な解説（＝内容要約）が記されている。

2 『著作集』について

『著作集』1は“日本浪漫派批判序説”と“美の論理と政治の論理”の二つの項目を大見出しとしている。“日本浪漫派批判序説”では政治に対する美の優越と日本の精神的伝統を以て、悪しき現実（軍部や政治的強権）を俯瞰し、「無限の自己否定」として自己を主張した日本浪漫派の文明批判⁽³⁾のエトスを橋川文三はイロニイと呼んでいる。

“美の論理と政治の論理”と同名の橋川の論文「美の論理と政治の論理」は——三島由紀夫「文化防衛論」に触れて——とサブタイトルにあるように、三島の1968年（昭和43）『文化防衛論』に対して書かれたものである。それに対して三島からすぐに反批判「橋川文三氏への公開状」が書かれたが、橋川はそれへの返事は発表しなかった。（三島の「文化防衛論」は1968年（昭和43）7月号『中央公論』に発表され、橋川の「美の論理と政治の論理」は同年9月号の同誌に発表され、三島の反批判は同年10月号の同誌に掲載された。）

三島由紀夫の「文化防衛論」（のち1969年4月新潮社刊 所収）は「反相对主義」的の性格が濃厚で、「天皇制」を日本文化の基本と仰ぎ、「絶対主義」の主張を展開した⁽⁴⁾が、本論文で橋川は、三島は「日本文化における美的一般意思ともいふべきものを天皇に見出ししている」（p.243）と述べている。ここに言う「一般意思」とはルソーの言うそれであり、「すべての個人の特殊な利害関心に基づく多様な意思の集合に対し、一つのネーションとしての統一的意味を付与するものこそ、絶対に誤ることのない自然法則のごとき一般意思である」（同）と言うのがルソーの「一般意思」である。つまり、「天皇」こそが日本というネーションの美的統一を与える根本の存在であると三島は考えたのだと橋川は言う。もっとも「天皇」には「文化概念としての天皇」と「政治概念としての天皇」があり、前者

が「日本の文化的伝統のすべてを象徴するとともに、またあらゆる日本人の多元的な横への拡がりによって生成する政治や文化におけるすべてのアナーキーをも包摂しなければならなかった」(p.249)のに対して、後者は「どこまでも権力の集中化と秩序化、それに対応するあらゆる「正統的」文化＝イデオロギーのみと結びつくものであることはいうまでもない」(pp.249-250)と橋川は述べている。久野収の言う「顕教」としての天皇と「密教」としての天皇(＝天皇機関説)⁵⁾を彷彿とさせるが、三島が天皇擁護のために「天皇と軍隊とを榮譽の絆でつないでおくことが急務」とされ、しかもその目的は「政治概念としての天皇ではなく、文化概念の天皇としての復活を促すものでなければならぬ」という部分について、「その論理がどうなるのかほとんどわからない」(pp.256—257)と橋川は言う。

橋川は三島は「文化概念としての天皇」が現実化したのちに、はじめて成立しうのような天皇と軍隊の関係をロマンチックに先取りしているのではないか(p.257)と述べ、「もしそうだとすれば、それは論理的にはもちろん、事実の手順からいっても、不可能な空想で」(同)あり、実現の可能性があるのは、天皇の政治化以外のものではないと言う(同)。

(1968年当時の)共産革命防止を究極の目的として天皇と軍隊の直結を言うのなら、政策論として少しも非論理的ではないが、三島の目的化が「文化概念としての天皇」の擁護にあるとするなら、それは論理的でもなく、現実的でもない(pp.257—258)と橋川は述べ、最後に「私には「文化」の一般意思と政治のそれとが一致するような人間生活のシステムを考えることはむずかしいのである」と文を結んでいる。『日本浪漫派批判序説』の中で橋川は「天皇支配の原理は国家構造の底辺細胞をなす家族と部落共同体においてもひとしく貫通しており、天皇権力への懐疑はそのまま個人生活の日常的局面における自壊を意味した」(p.85)として、日本政治における天皇制の政治観念は近代的神政政治ともいうべきシステムである(同)と述べている。もっとも橋川は天皇支配を美化しているわけではなく「近代史以降、天皇は「一度もその本質である『文化概念』としての形姿を如実に示されたことはなかった」(筆者注:三島の言辞)ということは、凡そ近代国家の論理と、文化概念としての、いわば美の総覧者としての天皇の論理とがどこかであい入れないものを含んでいたことにもとづくはずである」(p.256)と近代史以降、「文化概念としての天皇」が「政治概念としての天皇」化して来たことを鋭く指摘し、「実現の可能性があるのは天皇の政治化という以外のものではない」(p.257)と述べて、三島の「ロマンチック」な「先取り」を「不可能な空想」と断じている。そこには橋川の「絶望」が述べられている。三島は1968年10月号の『中央公論』に「橋川文三氏への公開状」を掲載し、橋川への反批判を行っている。その中で三島の反共の根拠は文化概念としての天皇の保持する「文化の全体性」の防衛にあるという考えは天皇のフレキシビリティにどこかで歯止めをかけたいという

欲求から生まれたもので、この欲求の中に文化の意思が働いている、また天皇と軍隊を榮譽の絆でつなげるには天皇の榮譽大権を武官にも復活すればよいだけの話だと三島は述べている⁽⁶⁾。橋川はそれに対してなんらの反応もしなかった。

『著作集』2 は“日本ナショナリズムの源流”と“柳田国男”が大項目として提示されている。(1967 年発表)「日本ナショナリズムの源流」では、日本の近代的ナショナリズムをデモクラシーの基盤に置いて考えるのは基本で、「自由民権運動の登場をまって、はじめて理論的にナショナリズムとして論じうることになる」(p.7) とし、ナショナリズムとデモクラシーの同一性を仮説して、近代ナショナリズム運動が発達したのは、個人主義と一般意思の理念を結びつけ、「服従」と「自主的支配」の全体的政治形態を考え、そこにはじめて近代ナショナリズムの一般理論を提示した、ナショナリズム理論の始祖、ルソーの場合もそうである(同)と述べている。“ナショナリズムの源流”の部分について、松本健一氏による的確な解説が「解題」の始めに以下の内容で付されている。前半にナショナリズムを軸とした群を置き、後半に「靖国思想の成立と変容」を含むナショナリズムの諸展開を扱った論稿を置き、「これによって、著者の問題意識がその後、パトリオティズムとナショナリズムとの関係、そして忠誠意識(ロイヤルティ)の問題、またその日本の特殊性ともいえる国体論、あるいは天皇制の問題へと視界をひろげていったことがみてとれるはずである。なお、こういった視界に接続する著作として、『ナショナリズム』(1968 年、紀伊国屋書店)ならびに「水戸学の源流と成立」(1974 年、中央公論社刊『日本の名著』29「藤田東湖」の解説)などが生まれた(『著作集』2「解題」p.359)としている。

もう一つの項目“柳田国男”については「常民」概念によって日本のナショナリティ(民族性)を抽出しようとした柳田民俗学を橋川は「新しい国学」として位置づけようとした(同 p.359)のであり、それを世界思潮の中に位置づけようとし、橋川の柳田国男への問題意識はその後、ロマン主義の対極に位置する保守主義への関心をひきよせた(同)と松本氏は簡潔に、的確にまとめている。

『著作集』3 の大項目は“明治人とその時代”“西郷隆盛・乃木伝説の思想”である。

“明治人とその時代”では同名の論文「明治人とその時代」で、西南戦争終結から明治 22 年の憲法発布に到る期間の日本を動かしたものは「未来の国家像の熱烈な模索」であったとし(p.8)、日清戦争の勝利によって人々は明治国家建設の方針は正しかったとみなした(p.9)、明治 30 年代の日本には帝国主義者(ex.高山樗牛)とキリスト教系もしくは自由民権派系の社会主義者が生まれ(pp.10-11)、日露戦争後には立身出世コースが固定化する反面、「高等遊民」が増大し、「煩悶」の時代が始まった(p.11)としている。石川啄木はその時代の典型的、象徴的存在と言えよう。

“西郷隆盛・乃木伝説の思想”では西郷を大久保の西洋的国家関係観とは異なる、東洋的「道義」外交で「朝鮮」問題に対処しようとした人と考え（「西郷隆盛の謎」p.316）、乃木の信じたものは「イデオロギーとしての国家」ではなく「シンボルとして実在する天皇のペルソナ以外のものではなかった」（「乃木伝説の思想」pp.356-357）としている。

『著作集』4 の大項目は“歴史意識の問題”と“歴史と世代”である。「解題」の最初の松本健一氏の解説がコンパクトによくまとまっている。以下、その要約である。橋川は日本の思想伝統には本来的に「歴史意識」が欠如しており、それを形成する最初の可能性が「戦争体験」論であるが、歴史意識の形成を阻害してきたものの一つが伝統的な「世代論」であると橋川は言う。第4巻は全巻を通して「戦争体験」論に収斂する作品を集めている、ということもできるが、その「戦争体験」論を、歴史意識と世代論との切尖によって普遍性へと開いてゆこうとしたところに、橋川の独自の思索の展開があった。（松本健一による本巻の「解題」の最初の解説 p.349。）

第4巻はかなり難解な巻であるが、橋川がコリングウッド、マイネッケ、トレルチ、マンハイム、ノイマンなどを広範に読んでいることがわかり、和漢洋の思想を橋川が渉猟していたことに橋川の深い教養を感じる。現在にはこうした和漢洋の幅広い教養を持つ人文系研究者はほとんどいないであろう。

『著作集』5 の大項目は“昭和超国家主義の諸相”と“戦争体験論の意味”である。

前者については「昭和超国家主義の諸相」（pp.3-63）が出色である。橋川は超国家主義を「現状のトータルな変革を目指した革命運動」（p.26）としてとらえ、井上日召、北一輝、石原莞爾等について論じている。超国家主義を国家を超えるものを志向する主義としてとらえ、丸山真男のように国家主義が極端にまで突き進められた主義としてとらえていない。「超国家主義の中には、たんに国家主義の極端形態というばかりでなく、むしろなんらかの形で、現実の国家を超越した価値を追求するという形態が含まれていることを言ってもよいであろう」（p.63）と橋川は述べている。“戦争体験論の意味”の項目では、戦中派の世代的関心に発する作品が多く集められ、前半では「戦争体験論を「普遍的なるもの」へひらいてゆこうとする作品が多く」後半では「体験じたいに即した作品が多い」。（松本健一氏による解説 p.367。）

『著作集』6 の大項目は“日本保守主義の体験と思想”と“現代知識人の条件”である。

「状況のなかにある自己を（筆者注：柳田国男の）「常民」の視点において洗い出さねばならない」と橋川は「次第に考えるようになったのではないだろうか」と松本健一氏は「解題」の最初の「解説」（p.329）部分で述べている。橋川という人は生真面目な人で、研究対象への目の付けどころや論の展開の仕方など極めてユニークで、そして難解である。「過去」

を忘れず、「過去」の謎解きを意識的に「現在」の中で行おうとしている。

本巻所収の「魯迅と蘇峰」(pp.264-266)は浅薄な蘇峰への批判の文章である。『大唐三蔵法師取経記』という稀覯本について、魯迅が元代のものかもしれないと書いているのに対して、蘇峰はその本の現物を持っている上に、金石の大家、羅振玉もそうじゃないと書いているじゃないかと学問的權威を背景としてもものを言っていることを魯迅が反批判しているのを橋川は紹介している(pp.265-266)。山路愛山が蘇峰について「布団の上で成人した人物で、世間のことがわかるはずはないんだよ」と言っていたことを紹介して、「どうも書物という世間(世界)についても同じことがいえそうに思われる」(p.265)と橋川は蘇峰を批判している。

『著作集』7の大項目は“近代日本と中国”である。近代日本は中国とどう向き合い、また向き合わなかったのか、扱われる人名、事項だけでも福沢諭吉、岡倉天心、伊藤博文、田中義一、幣原喜重郎、東亜共同体論、尾崎秀実、郭沫若、魯迅、竹内好と多種多様である。橋川の文章は独特で、今の人には敬遠されやすいであろう。

「本巻に収められた作品の多くが雑誌『中国』の諸企画、および筆者と竹内好とが中心になった『朝日ジャーナル』の「近代日本と中国」と題した連載企画のもとに執筆されたことも、こういった著者の精神史のありよう(筆者注：竹内好とのつながりを通して橋川自身が日本ナショナリズムのアジア的展開の命運に目を開いてゆく過程それ自体でもあったこと)を推測させるはずである」(松本健一の解説 p.381)というのは本巻所収の作品の的確な解説であろう。

「福沢諭吉の中国文明論」(pp.3-52)では1985年(明治18)の福沢諭吉の『脱亜論』について、書かれた状況や福沢の究極の目的との関係などから評している。橋川は「脱亜論」を善玉悪玉論で断罪するというようなことはしていない。そうした姿勢は日本浪漫主義をパトリオティズムの視点から解明しようとし、単純な善玉悪玉論で断罪する姿勢をとらなかったことと通底するものがある。師友ともいべき竹内好にも善玉悪玉論を取らない姿勢はあったが、「アジア主義」の再検討を提議したまではいいが、「言いつばなし」が竹内好の一大特徴であり、「アジア主義」の場合もその御多分に漏れない。橋川には竹内の影響のもとに竹内の問題意識を発展的に探究したという面がある。このことについては後述する。

本題に戻って福沢の「脱亜論」であるが、福沢の中国観は1869年(明治2)『世界国^{くに}尽』にははっきりと表れていて「文明開化後退去、風俗しだいに衰えて、徳を修めず智をみがかず、我より外に人なしと、世間知らずの高枕」「負けて戦いまた負けて、今の姿に成行きし、その有様ぞ憐なり。」と中国に対して容赦ない批判を浴びせている⁽⁷⁾。1871年に結ばれた

日清修好条規のような日清提携論もあるにはあったが、福沢は1874年（明治7）3月頃から執筆を始め、翌1875年（明治8）3月に脱稿した『文明論之概略』で中国の停滞性や尚古主義を批判した。あいまいな「徳」よりも「智」を重視し、「智」の中でもとりわけ経済学を重視したことは創始した慶應義塾大学の特徴にも反映している。

諭吉の「脱亜論」の猛烈な中国批判は福沢の究極の目的から出てくるもので、その究極の目的とは「日本国民を文明へと進め、そのことによって日本国の独立を勝ちとることであった」⁽⁸⁾。

「脱亜論」にも問題はある、橋川はそれを①福沢は権力と権威の一元的集中が中国だと批判するが、それは日本の方ではないか②福沢は儒教＝中国文明と考えているがそれは中国社会の実態ではなく福沢の解釈に過ぎない——としている⁽⁹⁾。しかし、①②だけではなく、福沢は①②を知りながら、自分の空想性、非現実性を知りながら、あえてその主張＝「脱亜論」を立てたのではないか、「脱亜論」は福沢におけるもう一つの「瘦我慢の説」ではなかったろうか⁽¹⁰⁾と橋川は言う。その理由として、福沢が「脱亜論」当時の反動＝復古の傾向への反撃を目論んだこと、欧化主義を採った以上、それを貫徹すべきであると考えたことを挙げている⁽¹¹⁾。橋川は「福沢の「脱亜」は、そのまま後世のでくの坊たちが信奉したような安易な中国蔑視論の模範ではなかったということだけは銘記すべきことであろう」⁽¹²⁾と述べている。

橋川の福沢「脱亜論」への総合的評価は以下のようなものである。福沢「脱亜論」の目指したものは日本の「独立」であり、それは日清戦争で成し遂げられたが、「脱亜論」は、その有効性のめざましきの記憶によって、その後もながく政治指導者と国民の多くの信条として継承された。「脱亜論」にこめられた一定の自覚的な問題の限定は忘れ去られ、その形骸としての中国—アジア侮蔑の自然感情だけが残されることとなった。端的に言うならば、日清戦争後、日本人は何か別の人間になってしまったという印象である。本来の日本人というより、文明種日本人という変型人種のようなものになったかのようなのである。天心の「アジアは一つ」という声は、そうした日本人の魂が失われようとする時期の孤独な叫びにほかならなかった」⁽¹³⁾（「福沢諭吉と岡倉天心」）。橋川は本質的に無効になった「脱亜」の目標のかわりに、天心が新しい理想を告知したと言い、人間における「究極と普遍を求める愛」の源泉がアジアにあることを告知して、人々の自覚を呼び覚まそうとしたと言う。続けて天心を次のように総括している。「あの戦闘的な『東洋の覚醒』の中に「西洋の光栄はアジアの屈辱」という有名な言葉があるが、天心はその屈辱を屈辱ともしない魂を目ざますために、何人の眼をもあざむかない「美」のアジア的普遍性を人々に気づかせようとした。多様なアジアの美は、そうした天心の献身を通してはじめて一つなるものと

して統一されたわけである」⁽¹⁴⁾。天心は西洋美術より東洋美術の方が深いと考えていた人であり、「気韻生動」の重視などの中にその考えは見てとれるが、アジアの美の多様性を知悉しつつ、アジア的普遍性を人々に気づかせようとした先覚者であったと言えよう。

「尾崎秀実と中国—継がれざる遺産—」(pp.252-270)では、ソ連、中国共産党がヘゲモニーを握った形の中国、資本主義機構を離脱した日本という三民族の緊密な結合を中核としてまず東亜諸民族の民族共同体の確立を目指す「訊問調書」で述べた(pp.266-267)尾崎秀実について、橋川は中江丑吉、鈴江言一らとともに「いずれも私は日本人として輝かしい名前であると思っている。」(p.270)と述べている。橋川という人は過去や過去の人物について再評価する名手である。戦中派として戦中の日本浪漫派を独自の視点で再評価、再分析したことがその原点にあるように私には思われる。

「竹内さんの『魯迅』」(pp.365-368)では曹聚仁が竹内好の『魯迅』は平凡であると言っており、台湾の蘇雪林という女流評論家は魯迅嫌いで、女師大事件以来、魯迅嫌いになり魯迅を「妖怪」そのものだと言っていることを紹介している。続けて「竹内さんは魯迅を「妖怪」ともみなさず、かといって君子聖人ともみなしておらず、「それはどういう意味になるだろうか。私は竹内さんの新訳進行の目的は、その間の事情を自分なりに答えておられるのだろうと考えている。」(p.368)と述べている。竹内好が等身大のありのままの魯迅を新訳で表そうとしているという謂いであろうか。「竹内中文の思い出」(p.368-377)では橋川が竹内好に毎週金曜日2時間、1970年4月からの1年間、代々木の「中国の会」事務所で中国語の初歩を習ったことを書いている。橋川は中国語を習い始めてから、漢文を、頭からまっすぐ下へ(筆者注：荻生徂徠のようにしょうとうちよつか従頭直下(頭からまっすぐ下へ))読む習慣がつき始めた(p.371)と述べている。竹内好と橋川の関係については後述する。

『著作集』8の大項目は“対馬幻想行”“序跋集”“初期作品集”である。松本健一氏の解説(p.373)によると「この第8巻は、全体がおおよそ著者自身の精神史に関わる作品によって成立している。その意味で、本巻を通読すれば、著者の精神的生涯のあらすじを辿ることができるはずである」という内容である。橋川氏は対馬生まれで、広島へ移り、後に更に進学のために東京へ移り住んでいる。対馬という辺境から日本を見る視点があり、それは西郷隆盛を論じるときにも反映されている。

以上、『著作集』1から8を通観して思うのは、橋川文三という人が過去の日本の「負」の歴史の中に未来に役立つものを発掘しようとした人であるということである。日本浪漫派、日本ナショナリズム、乃木希典、超国家主義、すべて戦後、日本人が「負」として切り捨てて顧みなかったものである。西郷隆盛や戦前中国への評価は賛否両論が存在する。橋川はそれらへの鎮魂歌レクイエムを捧げつつ、未来への糧となるものを探求したのであった。

竹内好も過去の中から未来に役立つ糧となるものを見つけようとした人であった。もっとも竹内の場合は「言いっぱなし」で終わることが多く、その根本理由は中国語をきちんと勉強していないからのように私には思われる。中国古典を非常に嫌い、中江兆民が徳育のために孔孟の教えを官立の外国語学校で科目の一つにしようとしたことを「悲惨な感じに打たれた」(＝「情けない」という意味であろう)と言った(竹内(1949)「日本人の中国観」竹内好(1980)所収 p.15)竹内の依るべきものは、自分を旧時代の産物と位置づけ、白血球が病原菌を退治したら死滅するように、自らも死滅し忘却されることを望んだ魯迅であった。主観教条性の塊の「竹内魯迅」は現在では研究者にまともに相手にされないが、橋川文三は竹内好と交流する中で、竹内の課題を継承し、より明確な形で論じ、独自の展開をした人物⁽¹⁵⁾であると言えよう。

以下、田澤晴子(2018)によって、竹内の橋川への影響と継承、発展について述べてみたい。竹内からの影響として、田澤晴子(2018)はまず、柳田国男についての竹内から橋川への影響を挙げている。①柳田国男と魯迅が「アジアにおける一定の歴史時代の暗黒さを共通に象徴」していると指摘している点②柳田の「常民」が天皇制国家の「臣民」と対峙する可能性に言及している点——という二点を橋川が竹内から影響を受けた点としている。①については、田澤晴子(2018)は古いものへの近親憎悪と啓蒙者としての発足を具体的に挙げ、②については、自民族の生活伝統への深い関心を持った認識者であることを挙げる。それらがいずれも竹内の具体的影響であるとする。そして、逆に、魯迅と柳田の決定的な違いとして、柳田の各国の相互理解への信頼感やアジアが先端となるという「楽天主」性とは反対に、魯迅は帝国主義を「人が人を食う」(“吃人”)世界とみていたとする。詳細は橋川の「魯迅と柳田国男」(1964年)「柳田学のこれから」(1975年)などを御覧いただきたい⁽¹⁶⁾。

田澤晴子(2018)は更に、橋川の西郷論は竹内の「第二革命」としての西南戦争論を継承する「西郷隆盛の反動性と革命性」(『著作集』3 pp.291-306)から出発しているとし、竹内の影響として、①橋川は竹内と西郷を重ねている②橋川は西郷伝説あるいは西郷の思想にアジア型の近代の可能性を見いだそうとする——という二点を挙げている。①については近代的な価値と「前近代への傾向」をあわせ持つ「二重人格」である竹内と維新革命の象徴でありつつ封建的反動でもある矛盾した存在の西郷を橋川はオーバーラップさせ、②については、竹内の「京都で行われた最後の講演」(1976年10月18日)を手がかりに、近代日本における魯迅の小説の特徴が西郷伝説において成立した可能性について橋川が示唆していること、また、西郷の「征韓論」にアジア連帯の可能性を読み込もうとしているのは、竹内を継承する側面があると田澤(2018)は言う⁽¹⁷⁾。②については田澤(2018)は

(注 21 で) 橋川 (1985) 『西郷隆盛紀行』あとがきに代えて (『著作集』3 pp.327-331) は「魯迅『阿 Q 正伝』等の小説に「カオスから出てカオスに消える」形式があり、それが「無名の民衆の姿」を写すものとし、西郷が死後民衆伝説となったこととあわせ、西郷が魯迅と同様「無名の民衆」の代表者であり「民族独立の英雄」となる可能性があることを指摘している⁽¹⁸⁾ としている。橋川は竹内の (近代的価値と「前近代への傾斜」を矛盾して持つ) 「二重人格」と西郷の (維新革命の象徴でありつつ封建的反動である) 「二重性」をオーバーラップさせ (①)、西郷が死んで西郷星になったという前近代的な西郷伝説にこそ、「アジア型の近代の可能性」を見いだそうとした＝「前近代」で「近代」を越えようとした (②)、とすることであろうか。

『著作集』3 では、既述のように橋川は西郷を大久保の西洋的国家関係観とは異なる、東洋的「道義」外交で「朝鮮」問題に対処しようとした人と考えた (「西郷隆盛の謎」(p.316) という。同巻の「西郷隆盛の反動性と革命性」(pp.307-319) では毛利敏彦『明治六年政変』を「日本近代史記述の傑作とっていい」(p.307) と絶賛し、「この本の主たる論点は西郷が征韓論者ではなく、ただ平和使節として韓国に行かんとしたにすぎないということ」(p.313) であると述べている。以下は、上記「西郷隆盛の謎」(p.316) と同様の橋川の考えを述べた部分である。「西郷は日本と韓国の情勢を見るに一種東洋的な感触をもったのに対し (それは参議中の副島・板垣・江藤らの考え方に近い)、大久保はそれをどこまでも西洋流の国家と国家の既成概念で見ている。我々はその後日清戦争を経験するが、その下関における講和会議において、李鴻章と伊藤の対立を描いたものともよく似ている。／西郷は朝鮮の無礼を東洋的な事実としてみており、大久保は同じものを西洋的な論理に照らして試みている。一方はそれで「道義」外交を柱とし、他方はそれに「論理」を以てむくいんとしているとでも言うておこう。このことは日清戦争期における李と伊藤の関係にもよくあらわれていると思うが、この日韓関係では結局一つの「秘策」が用いられ、そして伊藤はそのために知能をつくしている」(pp.315-316)。最後の「秘策」とは天皇の「転向」が作用することを指す (p.317) と、橋川は述べている。明治天皇が心変わりして「征韓論」(正確には東洋的王道論であろう) から転向したというのである。

天皇、天皇制については「日本浪漫派批判序説」(『著作集』1)「日本ナショナリズムの源流」(『著作集』2)「天皇感情についての断片」(『著作集』2)「乃木伝説の理想」(『著作集』3)などに言及があり、それらについては今までにも一部、触れたが、橋川文三という人の独創性は既成の学問の「規範」で物事を考え、分類するということをしないところにある。それゆえ、文章は難解である。あまり人に理解してほしいとも思っていないようで、丁寧な説明ということをほとんどしない。

咲き咲きしふちの紫ちりはてて若葉の緑ひとりのこれり

あんなにたくさん咲いていたふちの紫も散り果てて「一人」若葉だけが残っている。目に見える「若葉」という「現在」は、咲き咲いていた「ふち」のこと＝「過去」は知らないようだが、「現在」は「過去」を知ることによらずしては成立しないと言っているような短歌（『著作集』8 1936年（昭和11）7月15日発行『アカシア』第79号に発表された橋川の三連作の短歌「初夏の光」の三句目 p.289）である。

3 結びに代えて

1945年（昭和20）の敗戦以後、アメリカによる実質的な占領支配が行われ、日本人は物の豊かさを追求することが心の豊かさに通じると思い、朝鮮戦争による特需や所得倍増計画の効果もあって、日本は経済大国になっていった。日本人もよく働いて、高度成長期には日本はどんどん右肩上がりの経済発展をしていった。しかし、バブル崩壊後の日本は元気をなくし、不況が20年も続く中で、グローバリゼーションという名の、実体はアメリカナイゼーションの中で、現在、日本人は拝金主義に覆われた社会の中で生きている。今から30年ほど前、古都と言われる京都の町中にもセブンイレブンなどのコンビニが雨後の筍のようにできていった。外国人留学生も多く来日し、その中の6割ほどは中国人であるのに、国際化とは英語化であると勘違いしている輩によって、英語教育が極端に重視され、多くの日本人もそれを受け入れている。本来なら、日本語教師はもっと中国語に通曉した人間が増えてもいいはずである。そうならないのは、日本語教育が英語の言語習得理論などに依拠しているからである。日本語教師には和語ばかりで日本語を書いて、漢語と和語のバランスの中に日本語の文章のメリハリの本質があることを知らぬ者も多いのではないだろうか。やはり日本は1945年から1952年までの、7年間のアメリカによる実質的占領支配の後遺症から、今も立ち直っていないということであろうか。出世頭は自らアメリカに留学し、もしくは企業派遣されて、帰国し、日本人を支配する地位に就くのが暗黙の常識となっている。

竹内好や橋川文三はアメリカ化する戦後日本で、日本の過去を見直そうとした人であった。竹内好の場合は、中国崇拝論者となり、日本を全面否定した人なので、正確には「見直し」た人ではないが、橋川文三という人は明治以後の近現代の日本の「過去」を「見直し」た人である。その根底には、戦争で死んでいった友人たちへの罪の意識のようなものがあつたのではないかと想像する。こうした人こそ本来の日本人なのではないか。国際化

という「名」の曖昧性に騙されることなく、国際化時代の日本人として橋川文三のような過去の「発掘」を今後もすることを肝に銘じたいと思う。

〔注〕

- (1) 平野敬和 (2014) p.27。
- (2) 同 (1)。
- (3) 橋川文三 (1985)『著作集』1 p.44。
- (4) 青木保 (1999) pp.112－115。
- (5) 久野収 (1975) 朝日ジャーナル編集部編 (1975) 所収。
- (6) 中央公論編集部編集 (2010) pp.206-208。
- (7)『著作集』7 p.13。
- (8)『著作集』7 p.28。
- (9)『著作集』7 pp.42－44。
- (10)『著作集』7 pp.44－45。
- (11)『著作集』7 p.45。
- (12)『著作集』7 p.46。
- (13)『著作集』7 p.72。
- (14)『著作集』7 p.73。
- (15) 田澤晴子 (2018) 黒川みどり・山田智 (2018) 所収 pp.272－273。
- (16) 田澤晴子 (2018) 黒川みどり・山田智 (2018) 所収 p.272 参照。
- (17) 同上 p.273。
- (18) 田澤 (2018) p.279。

【引用文献・参考文献】

- (1) 平野敬和 (2014)『丸山真男と橋川文三 「戦後思想」への問い』新曜社
- (2) 橋川文三 (1985—1986)『橋川文三著作集』1—8 筑摩書房
- (3) 青木保 (1999)『日本文化論の変容 戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論新社 中公新書
- (4) 久野収 (1975)「北一輝《革命の実践》」朝日ジャーナル編集部編 (1975) 所収
- (5) 朝日ジャーナル編集部編 (1975)『新版 日本の思想 下』朝日新聞社 朝日選書 46
- (6) 中央公論編集部編集 (2010)『中央公論特別編集 三島由紀夫と戦後』中央公論新社
- (7) 田澤晴子 (2018) 第二部 思想と近代史—各論編— 二 明治維新の展開 黒川みどり・山

田智（2018） 所収

(8) 黒川みどり・山田智（2018）『竹内好とその時代 歴史学からの対話』有志舎

(9) 竹内好（1949）「日本人の中国観」竹内好（1980） 所収

(10) 竹内好（1980）『竹内好全集』第四巻 筑摩書房